

## 近角常観の郷土における宗教活動と ネットワーク<sup>1)</sup> (上)

三 宅 正 隆

目次 (上)

1 はじめに

2 近角常観の生い立ち、親族関係

2.1 常観の実母千代野と親族

2.2 常観の従弟大観と継母雪枝

2.3 書簡類の翻刻と解題について

3 書簡、ハガキの解題

3.1 常観の欧米視察 [資料1]

3.2 ベルリンへの便り [資料2]

3.2.1 常音への受験アドバイス

3.2.2 西田幾多郎と常観

3.2.3 ベルリンからの帰国

3.2.4 『政教時報』、『求道』の発刊と休刊事情

3.2.5 井口乗海の回心告白

資料：翻刻 [資料1]、[資料2]

(以下「下」)

3.3 求道会館設立まで [資料3] [資料4]

3.3.1 常音の受験および丸山環と池山栄吉の接点

3.3.2 姉川地震と郷土の同朋ネットワーク

3.3.3 求道会館落慶式と落慶記念品

3.4 句仏事件と郷土の支援者 [資料5]

3.5 病床生活への見舞状 [資料6] [資料7] [資料8] [資料9] [資料10]

3.6 除名処分の宥免と家族 [資料11]

3.7 疎開と雪枝の27回忌 [資料12]

4 おわりに

資料：翻刻 [資料3] ～翻刻 [資料12]

1 はじめに

2014年に碧海寿広による『近代仏教のなかの真宗—近角常観と求道者たち』、岩田文昭による『近代仏教と青年—近角常観とその時代』と近角常観の名前をタイトルの一部とする書籍がほぼ時を同じくして出版された。またその少し前には、近角常観がその活動の場とした求道学舎や求道会館の再建について書かれた近角こかく巖子による本も出版されている<sup>2)</sup>。いずれの著者も近角常観という名前が一般には無名に近いことを述べ、再評価の必要性を訴えている。例えば、岩田はその著書で近角常観について次のように記している。

真宗大谷派の僧侶、近角ちかづみじょうかん常観（1870-1941）の名を知る人は少ない。一般の人はむろんのこと、近代日本思想史・精神史の研究者からもその名が語られることは多くない。常観の所属していた真宗大谷派の内部でも、その活動の具体的内容について論じられることはまれである<sup>3)</sup>。

碧海もほぼ同じような説明をしている。

近角は明治後期から昭和初期にかけて活躍した、真宗大谷派の僧侶である。少なくとも彼が生きていた時代にはかなり著名であり、影響力もあったが、いまではほとんど知られていない。近代仏教史をはじめとする日本の近代史においてわずかに名前が言及されたり、あるいは大谷派の宗門内の一部で語り伝えられたりしているだけであった<sup>4)</sup>。

もちろんこのように今日の知名度の低さが強調される背景には、彼らの著書によって近角の日本の近代史、仏教史に果たした役割の重要性を知らしめるとともに、なぜ大谷派の宗門内でさえこのように無視され続けているのか、その歴史的な背景を明らかにしたいという意図がある。例えば岩田は、常観が当時の多くの知識人、特に「青年」たちに大きな影響を与えたにも関わらず<sup>5)</sup>、仏教関係だけでなく他の分野においても無視され続けてきたのは、一つには自分の後継者となる弟子を持たなかったことに加え、いわゆる句仏事件で法主擁護の立場に回り、大谷派内の封建的体質からの脱却を目指し、教団運営の中心となった改革派との対立を招いたことを指摘する。その上で岩田は、常観が西洋哲学の研究や西洋の視察などをとおして、日本に押

し寄せた近代化の波の中でどのようにして西洋を受容し、それを消化し、布教の中で多くの信者に伝えていったのかを、常観の生い立ちや家族との関係から宗門運動、布教活動などにわたって、多角的な視点でこれを検証している。一方では常観個人に関して彼の生涯にわたる宗教体験、活動を検証するとともに、他方では彼の影響を受け、様々な方面で活躍した知識人の生き方や業績の中に、常観の影響、特に、彼が常々説いた相対世界でいかに絶対者としての仏の慈悲を自身で体感するかという課題が生かされていたかを明らかにしている。そして近代化に与えた影響は、仏教界や宗門内では直接の形としては薄いにしても、日本の近代社会、文化などの面に注目すれば、彼の与えた影響は無視されてはならないほど大きかったことを強調している。

このように「宗教家」としての常観の影響が宗教以外の領域で見いだせることに対しては、従来ほとんど目が向けられなかった新しい視点であるが、「宗教家」としての常観の宗教観や宗教活動についても碧海や岩田等の研究で明らかになりつつある。その焦点は、彼らの著書の表題に共通する「近代仏教」についてである。日本文化の歴史は先進文化の受容の歴史でもあるが、その受容の仕方は、単なる模倣ではなく、既存様式の中への巧みな同化であるても同時に強調される。近角の場合も、岩田は「伝統的宗教を再編成」したてんに焦点を当てて、一方では郷里の真宗末寺の住職として伝統を引き継ぎつつ、東京では伝統的な家を中心とする檀家制度から離れ、自身の選択で仏教と向き合おうとする青年たちを相手に講演や様々な布教活動に専念した常観を描いている。

幾分個人的なことになるが、碧海の引用にもあるように、近角常観という名前は一般には馴染みが薄いが、「大谷派の宗門内の一部」である我が家では、彼については細々ながら「語り伝えられ」ていて、彼の著書も何冊か書棚に並んでいるし、法事など親戚等が集まった席で話題になることもある<sup>6)</sup>。というのも、実は筆者の父方の祖父母が常観のいここにあたり、生前中、祖父やその兄弟たちがかなり近しく近角と書簡を交わすなど付き合いがあり、親戚内では彼は飛び抜け「有名人」であったからである。しかしながら、近年常観の話を伝え聞いてきた人も次々に亡くなり、彼の人柄や逸話、生前中の活動などについて語れる人は今日ではまったくいなくなってしまった。

このような中で筆者はたまたま岩田氏の著書を知り、そこに「常観の実母は、常観が3歳のとき死亡した。このことについての情報は少ない。…実母の俗名は、現在では知る人もいないといってよい」とあるのを見つけ<sup>7)</sup>、なんとか親戚の存在を知らせなければと、たまたま常観の郷里で開かれた岩田氏の講演会に出かけ、常観研究の現状について知るようになった<sup>8)</sup>。

上記の著作の研究土台となった資料は岩田文昭教授を研究代表者とする2度にわたる科研の成果である。最初の科研については『近代化の中の伝統宗教と精神運動：基準点としての近角常観研究』の中間報告書ならびに研究成果報告書としてまとめられている<sup>9)</sup>。この最終成果報

告書の第2部『資料編』には求道会館所蔵図書や書簡、また数人からの書簡の翻刻と解題が掲載されている<sup>10)</sup>。「求道会館所書簡」については大澤広嗣が滋賀県の関係者、東京帝国大学の出身者、仏教関係者、真宗、仏教関係者、求道学舎・会館の支援者など9項目について解題をまとめている<sup>11)</sup>。膨大な資料なので項目ごとに人名をあげるにとどまっているが、「おわりに」で大澤は「... 明治期から昭和前期までの時期を研究対象としている、あらゆる人文社会系の研究者は、この求道会館の書簡目録に一度は目を通して欲しい。... 近角常観の人脈のさらなる分析、ならびに信徒による宗教観を告白した書簡の内容分析は、今後における重要な研究課題である」と結んでいる。筆者も大澤氏の呼びかけに応じる形で書簡目録を見て、かなりの差出人を特定することができた。ここではその中でも近角常観の郷土での親族を中心とする人間関係や人柄などについて、郷里で語り伝えられている話などを参考にしながら、「忘録」を兼ね、近角に関する書簡の翻刻とその「解題」を中心に、まとめておく<sup>12)</sup>。

## 2 近角常観の生い立ち、親族関係

### 2.1 常観の実母千代野と親族

東野山とうやさん円照えんしょう寺じは現在の滋賀県長浜市高月町馬ま上けにある真宗大谷派の末寺で、1478（文明10）年の円預を開基とするが、実質的には浅井長政の臣東野佐馬之助の二男が出家して釈信了と称し旧浅井郡安養寺村（現長浜市浅井町安養寺）から承応4年に現在の馬上に移ったことから始まる。近角常観の母千代野はこの円照寺第12代住職圓澄の長女として誕生している。圓澄は6人の子供をもうけた。千代野には男兄弟として兄と3人の弟がいて、長男で兄の円隆は父の後を継ぎ第13代円照寺住職となったが26歳で亡くなり、二男の恵誠がその後を継ぎ14代目の住職についている。千代野の弟である円竟は幼くして3歳で亡くなったが、末の円寿は今津の寺に養子として入寺している<sup>13)</sup>。

常観の実母千代野には11歳年下の妹がいて、とさ（登佐、別名「たづ」）と呼ばれていた<sup>14)</sup>。とさはやはり近くの真宗大谷派の寺院へ嫁いだが、夫である住職がまもなく亡くなってしまう<sup>15)</sup>。しかしこの時とさは腹に息子の環を宿して、結局実家である円照寺へ帰ることになった。その後とさは近くの西阿閉村の恩覚寺住職三宅諦隆との縁談がまとまり、息子の環を同じ馬上にある真宗大谷派の寺院行信寺の丸山氏に養子として預け、明治10年に諦隆に嫁いだ。やがてとさは諦隆との間に神開、諦忍という2人の息子をもうけた。したがって行信寺に養子に入った丸山環と三宅神開、諦忍とは異父兄弟になる。環は1873（明治6）年生まれで、神開とは4歳、諦忍とは15歳離れていたが、互いに仲も良く、晩年になるまで頻りに書簡のやり取りをするなど、付き合いを続けた。

一方、千代野は円照寺が移転する前にあった安養寺の隣村の延勝寺村西源寺に嫁ぎ常観をも

うけたが、常観が3歳の時に亡くなった<sup>16)</sup>。その後常観は現長浜市虎姫町大井の西雲寺から後妻として常随に嫁いできた雪枝に育てられることになる。しかし一方で常観は母千代野の弟恵誠と妹のとさの関係で多くのいところを持つことになる。兄恵誠とその妻小梢との間には11人の子供がいた。その頃はしばしば寺院間で婚姻や養子縁組を行う習わしがあって、恵誠の9人の娘もそれぞれ近くの寺に嫁している。その一人である六女春江はとさの末息子の諦忍に嫁いでいる。

恵誠と小梢の長男恵海（利孝）は恵誠が亡くなると円照寺を継いで第15代の住職となっている<sup>17)</sup>。常観の従兄弟姉妹は恵海をはじめ、15、6人にもなるが、男の従兄弟は5人と少なかった。しかし近角と故郷での従兄弟同士の付き合いは長く続いていた。後でも触れるが、本家円照寺の住職となった恵海は一時東京にでていたが、東京では近角兄弟とも近しくし、常観、常音あての書簡も残されている。恵海は46歳で病死したが、常観は彼の病床に歎異抄の一節を揮した掛け軸を贈って見舞っている。近角と丸山環、三宅神開、諦忍とは以下の書簡のやり取りからもわかるように、長く親戚付き合いを続けていた。

近角の従兄弟関係で残されている書簡は丸山環と三宅諦忍、それから東野恵海（利孝）から出されたものがほとんどである。関係する事項についてはそれぞれの書簡、ハガキのところで述べるとして、少し丸山環、三宅諦忍についても説明しておく。

先にも述べたように丸山環は三宅神開、諦忍の異父兄で、常観とは母方の従兄弟同士になる。丸山環は常観の3歳年下になる。やはり東京帝大独文科を卒業して、文部省の視学官、督学官となる。1900（明治33）年に旧制第六高等学校が開校すると、ドイツ語教授として赴任し、その後1908（明治41）年に名古屋の八高が設置されると、そこでしばらく教鞭をとり、その後1919（大正8）年より1924（大正13）年まで岡山に移り、六高の第3代校長になる。その後1924（大正13）年から旧制私立甲南高等学校第2代校長として1933（昭和8）年まで神戸住吉に居を構えた。九段精華高女の校長を最後に郷里へ帰り、晩年は馬上で過ごした。その間どの程度自坊の法務をこなしていたかは定かでないが、形式上は行信寺の住職であった<sup>18)</sup>。文部省の視学官、督学官をし、教職にも長くついていた関係で教育分野に関わる人脈も広く、親戚、知人の職のあっせんや進学などの相談にのっていたようである。後で見るように、常観も弟常音の進学問題や友人の就職などについて丸山に相談している。

一方三宅諦忍は1888（明治21）年生まれで、父諦隆の52歳の子供であった。諦隆は諦忍8歳の時に亡くなり、母親の手で育てられた。地元の小学校を卒業し、1906（明治39）年、稲葉昌丸が校長の時真宗京都中学を優秀な成績で卒業している。詳しい経緯はわからないが、10代で兄神開と北海道に渡っている。門徒信者が北海道まで二人を連れ戻しに行くが、結局弟の諦忍が帰郷し、恩覚寺を継ぐことになった。その後、やはり常観のいところにあたる春江を馬上円照寺より妻に迎えている。西源寺での法事の際には親戚法類として手伝いをするなど、

近角家とは親しく付き合いをしていた<sup>19)</sup>。諦忍は春江との間に6人の子供をもうけ、長男了忍が次の住職となった。

## 2.2 常観の従弟大観と継母雪枝

常観には異母弟である常音の他に「兄弟よりも親しく言わば双子同様」に育った従弟がいた<sup>20)</sup>。東溪大観である。大観は常観と同一年で、7歳の時父親を、また12歳の時母親を相次いでなくしている。父親を亡くした時に3年、また母親をなくした後も3年西源寺に引き取られ、常観たちと一緒に育てられた。1885(明治18)年に常観と一緒に京都の宗門の学校に入り、同じ寮で生活した。しかし大観は自坊を継ぐため1年で故郷の浄法寺に帰り、すぐに日清戦争に徴兵された。『求道』2巻8号には大観からの書簡「東溪君の遺簡」とともに常観による「断腸録」と題する一編が掲載されているが、これは大観が日露戦争で戦死したとの知らせを受けた時のものである。

常観は歎異抄の第2章を特に大事にし、この話の折にはしばしば父常髓との因縁話を引用するが、大観との因縁も懐かしく語っている箇所がある。それは、もともと『求道』に書かれ、『信仰問題』にも再録されている話で、「親鸞聖人の信仰」と題した講話が評判が良く<sup>21)</sup>、方々から大きな反響と謝辞が送られたが、「一番初めに(礼を)言いに来てくれたのが私の徒弟」だったというもので、この従弟が歎異抄を大切にいただいていたことを殊の外喜んで<sup>22)</sup>。同じ『求道』でこの従弟について「断腸録」では書けなかった逸話も披露されている<sup>23)</sup>。それによると、大観は性格はよく誰からも愛され、軍隊では軍曹にまでなったが、勉強があまりできず、お経の覚えも悪く、この面では劣等感を持っていた。大観が日清戦争から引き上げると、自坊の住職が待っていた。それなのに宗旨のこともわからず、門徒教導を果たす自信もなく、なんとも言えない寂しさを感じながら家にたどり着くと、まず本堂に向かった。何気無くそこにあった蓮如上人の『御文』を開くと次の文句が目に入った。開かれた頁には「それ八万の法蔵を知るといふとも、後世を知らざる人を愚者とす。たとひ一文不知の尼入道なりといふとも、後世を知るを智者とすといへり」という御文で、これを読むや、学問の有無で悩んできた愚かな自分をお見捨てにならない慈悲をいただき、住職を務める覚悟ができたという話である。常観は彼について「爾来このお慈悲一つを喜んで、戦死に到るまでやらさせて貰はれたことであつた」と結んでいる。

大観には一人娘の文千代がいた。父親亡き後は常観を父親と思い、頼っていたが、彼女も結局は病気でなくなり、大観亡き後浄法寺は馬上の誓順寺住職の梶井氏が住職を兼務した。大観と常観と一緒に常随から三部経や四書五経の教えうけたが、二人はとりわけ歎異抄の拝読には熱心で、常観も戦場へ『求道』を送り続けていた。常観は大観が亡くなる前の年に父常髓を亡くし、また大観のすぐ後には長女の光子を送ることになった。「火宅無常の世界はそらごとた

わごとまことあることなし」を思い知らされる日々を送ることになった<sup>24)</sup>。

常観が3歳で実母を亡くしてからは、後妻として迎えられた雪枝に育てられた。二人は実の親子以上ほどの特別な絆で結ばれていたことは岩田もしばしば強調する点である<sup>25)</sup>。岩田も引いている磯長詣はもちろん、本山や吉崎御坊など、一緒に参拝に出かけることも多く、地方の講演に出かける際延勝寺に立ち寄れないときなどは、雪枝がわざわざ米原駅まで出かけ、ホームで会ったりもしている。実母である千代野とは幼くして別れたとはいえ、千代野関係のいとこたちとは近しくしていたわけで、その事実については知っていたはずであるが、実母については公式の場では一切語ることはなかった。この点について、岩田は次のように述べている<sup>26)</sup>。

常観の誕生した西源寺と実母の実家とは、きわめて近い距離にあり、その後の従兄弟たちの交流関係を見ても、常観自身は実母の出自は知っていたに違いない。ところが、常観はこのことを一切口外せず、常観の直系にあたる人たちは、常観実母の氏名などまったく知らされていなかった。おそらく、常観には、育ての親に対する強い恩義の感覚があったのだろう。そして、常観は聖徳太子の三骨一廟の伝承をもとに、継母を阿弥陀仏のごとくに思い、大切にしたい。常観の実母の姓名が近角家に伝承されなかったのには、このような状況があったのである。

雪枝は1919（大正8）年12月14日に亡くなっている。法名は悲心院釈尼随悟で、他の家族と一緒に西源寺のお墓に納骨されている<sup>27)</sup>。実はこの年8月26日には1歳を迎えたばかりの三男の常聡も亡くなっている<sup>28)</sup>。常観の父親や光子、常聡、また20年ほど後に戦死する長男文常などの死については『求道』や『信界建現』で一般にも知らされているが、雪枝の死についてはまったく触れられていない。しかし亡くなる数年前から病気がちであったことは知人からの書簡などからうかがえる。後でも少し触れるが、この時期『求道』の発行が滞りがちになったのは、時代背景とともに、かけがえのない家族の不幸が続いたせいかもしれない。

一方、雪枝の親元である大井の西雲寺でも父親がなくなり、後継者問題で常観は自坊だけでなく親戚についても頭を悩ますことになる。西雲寺については、一時常観が住職を兼務していたが<sup>29)</sup>、その後竹ヶ鼻氏が住職につき現在に至っている<sup>30)</sup>。

### 2.3 書簡類の翻刻と解題について

以前親戚で常観について得意げに色々話していた人々も、今ではほとんど故人となり、書簡などを整理する過程で確かめたいことも次々出てきたが、かなわず、頼る資料としては、聞き覚えた断片的な話に加え、手元に残る常音氏からの書簡と、求道会館に残る常観や常音氏宛て

の20通ほどの手紙類である<sup>31)</sup>。以下では丸山環と三宅諦忍の書簡について、年代順に若干の解説を加え、最後に書簡資料としてその翻刻を載せる。解題としてできる限り資料の内容に限るつもりであるが、若干間接的にしか関係しない事項や人物についてもコメントを加えている。もう一人「本家」のいところになる東野恵海（利孝）からの書簡については、別にまとめてコメントを加えることにする。常観と丸山環のやりとりを見ると、近角から環や利孝に宛てた手紙もかなりあるはずであるが、残念ながら丸山家や東野家の親族の手元には全く残されていないようである<sup>32)</sup>。ここで解題の対象として扱う書簡、ハガキは以下のものである<sup>33)</sup>。翻刻は立命館大学大学院文学研究科日本文学専修博士後期課程在学中の池田彩音さんにお願ひし、また、立命館大学文学部川崎佐知子教授にも種々ご指導をいただいた。漢字はできる限り現在通行の字体に、また変体仮名は標準形に改めた。句読点、字空き、改行などは筆者の判断によるものである。

資料番号	差出人	宛先	日付または消印	所蔵場所
1	丸山環	近角常音	1900(明治33)年10月13日	求道会館資料(ハガキ)
2	丸山環	近角常観	1902(明治35)年1月1日	求道会館資料(封書)
3	丸山環	近角常音	1908(明治41)年7月8日	求道会館資料(ハガキ)
4	丸山環	近角常音	1908(明治41)年10月14日	求道会館資料(ハガキ)
5	丸山環	近角常観	1915(大正4)年4月22日	求道会館資料(封書)
6	近角常音	三宅諦忍	1930(昭和5)年9月24日	恩覚寺(三宅)(封書)
7	丸山環	近角キソ子 <sup>34)</sup>	1931(昭和6)年12月7日	求道会館資料(封書)
8	三宅諦忍	近角常音	1931(昭和6)年12月14日	求道会館資料(封書)
9	丸山環	近角常音	1932(昭和7)年1月14日	求道会館資料(封書)
10	丸山環	近角常音	1932(昭和7)年5月14日	求道会館資料(封書)
11	丸山環	近角常観	1936(昭和11)年5月27日	求道会館資料(封書)
12	近角常音	三宅諦忍	1945(昭和20)年3月6日 <sup>35)</sup>	恩覚寺(三宅)(封書)

### 3 書簡、ハガキの解題

#### 3.1 常観の欧米視察 [資料1]

最初のハガキは1900(明治33)年10月に丸山環から常音宛に出されたものである。1900年といえばこの4月には常観が東本願寺の命によって欧米視察に出かけた年である。差出人の丸山環はこの年創立された岡山の六高(旧制第六高等学校)に教授として迎えられている。このハガキは岡山への転居を知らせるものである。丸山はその後文部省の督学官に就任する

が<sup>36)</sup>、1919（大正8）年より24（大正13）年まで六高の第3代校長を務めた。

この常観の欧米視察は東本願寺の命によるもので、1900（明治33）年4月から当初3年の予定で、終生近しく付き合うことなる池山栄吉らとともに旅だっている。実際に東本願寺からどのような命を受けたのかについては『宗報』などにも特に見当たらない<sup>37)</sup>。一説では、宗教法案反対運動などの功績が認められた「ご褒美」であるとの見方もある。この年4月発行の『無尽灯』の「近事」には「近角常観氏 今回大谷派より3ケ年の予定にて海外派遣を命ぜられたる同氏は政府より亜米利加へ出張を命ぜられたる監獄事務官小川滋次郎氏と共に先ず渡米して彼地に於ける監獄等の事に関して視察を終え而して欧米諸国に航し尚1ケ年間はドイツに留学するつもりといふ」と常観の予定が掲載されている<sup>38)</sup>。ただ、本願寺には海外視察のための派遣はまだ制度としてはなく、かなり恣意的に進められたのではないかとも思われる。後に清沢学長（学監）の補佐を勤めた関根仁応氏は宗門の歴史を知る上でも特に貴重な克明な日誌を残しているが、この時期の日誌に真宗大学移転開設に向け準備段階で予算執行がなかなかままならぬ事態に直面し、つい「彼近角1万金ヲ留学ノ為ニ前金取ヲナセルガキ「何ゾ必シモ正當ノ要センヤ」と、この件を引き合いに出している<sup>39)</sup>。これに関して少し興味深い常観宛の書簡が求道会館の資料に残されている。そこには、「丁度君ガ帰国ノ時石川ガ退イタ時デアッタカラ、石川ノ尻押ニヨルコト多キ君ニハ随分困難ノコトモ多クッタデアロー」という一節である<sup>40)</sup>。この「石川」と言えば句仏上人とも近い間柄であった石川舜台のことで、彼は丁度常観が海外にいた2年間寺務総長の職にあった。常観はこの時期大日本仏教徒同盟の総務員として公認教制度の実現や宗教法案反対運動の先頭に立ち、宗教法案の阻止に大きな役割を果たしており、この点で石川は常観を高く評価していた。石川舜台は1872（明治5）年新法主の大谷光瑩（厳如）が極秘で欧州へ渡った時、随伴した4名の1人であり、この時の経験から人材養成の必要性を痛感し、帰国後南條文雄などをイギリスなどに留学させるなど、海外派遣を積極的に行ったことでも知られる。近角の留学についてもいろんな意味で、石川の「尻押し」（ご褒美？）があったのではないかと思われる。

当時常観が中心になって発行していた大日本仏教徒同盟の機関紙『政教時報』に「常観氏の漫遊」、「近角氏の送別会」と題して「会報」欄に短く報じられている<sup>41)</sup>。「近角氏は...宗教制度、社会事業など観察のため...欧州各国巡遊の途に就」き、出発2日前に「...小石川植物園において仏教青年会など相合して...祖道の宴を張りぬ」云々。清沢満之など50余名の参加者がめいめい挨拶をしているが、そのうち村山（専精）と井上（円了）の挨拶が次のように紹介されている。一言ずつであるが、当時の宗教事情や常観の心境が垣間見られて、興味深い。井上は、近角とは長年親交を結んでいるが、主義、意見が反対のため少々離隔の思いがあるが、この渡航は大いに賀すべきことである。ただ「公認教取調のためのみ渡航せらるるは余の採らざる所なり」。一方井上氏は「今日耶蘇教の勢力は何によりて来るかを考えなば、蓋し思い半

に過来るものあらとて今回近角氏は此点のみ着眼し、毫も宗教哲学の如きは研究を要せずして可なり、全く宗教者としての法律者となり歸朝せられたきを望むと。これに対して近角は「飽迄主義を貫徹せざれば止まずとなし。余は私交上に於ては例え異主義、異教者の人と雖も手を握るの交情に至ては少しも変わらざる」と自分の所信を述べた、というものである。常観は13日正午英船チャイナ号に塔し、横浜港を後にした。

常観はベルリンでふた冬を過ごしている。新年の挨拶がてら出した2通の書簡が公刊されている。1通目は『信仰問題』に「伯林より」として掲載されている母宛ての手紙。中に「馬上の伯母様大いに御待ち被下候由、如何なる訳にや旅行中私もよく叔母様を思い出し候」と故郷について懐かしがり、ドイツの「老婆は何れも感心なソレハソレハ良い人が多く有之」そして、その老婆たちには太った人が多く階段の上り下りにも苦勞しているところを見ると、「其時は何時も直に伯母様を想ひ出して、丁度此様に肥へたシコモ善ひ人々やと思ひ、幾度となくアリアリ御目に掛る心地致候」とユーモアたっぷりにしたためている<sup>42)</sup>。日本食を懐かしがり、「母上の御料理江州の菜漬杯大に想ひ出され候」とある。

ふた冬目の便りは『宗報』に掲載された「伯林通信」である<sup>43)</sup>。「在獨逸伯林留学生近角常観より1月23日付を持って左の通信あり」とあるので、本山としてはこの海外派遣は「留学」扱いであったことがわかる。この手紙が掲載されたのは1902(明治35)年3月15日で、実際にはこれより9日後に常観は帰国し長崎に着いているので、帰国がかなり急なことであったことがうかがえる。

常観自身によるドイツ滞在中の体験談や報告は、随時『政教時報』に掲載されたが、滞在中随時発表されていた記事をまとめたものが『信仰問題』「付録」にも掲載されている。さらに、帰国の翌年1903(明治36)年2月には外留中に清沢によって発行された『信仰の餘瀝』に、新たに「自序」と付録として「讀經餘瀝」を加え、第3版として発行したものなどにも見ることができる。

余談になるが、筆者の姉は我々の母が語った昔のことを、断片的にメモとして残している。その中に、「常観氏は夏目漱石と知り合いだった」という一行がある。これまで気にも留めなかったが、調べて見ると、夏目漱石(金之助)がイギリスに留学したのは常観と同じ1900(明治33)年である。漱石らの出発は9月で、常観は4月に日本をたち、アメリカ経由でヨーロッパに入り、イギリス、フランスを経て10月にベルリンについている。夏目に同行したのは藤代禎輔、芳賀矢一、稲垣乙丙である。最終的に夏目はロンドンに向かったのに対して藤代、芳賀らはベルリンに向かい、常観らと2年滞在することになる<sup>44)</sup>。芳賀は「留学日誌」としてこの時の滞在記録を残している<sup>45)</sup>。当時ベルリンには日本政府の官僚や銀行員、また芳賀のような文部省からの派遣者など日本人常時100名ほど滞在していて「和独会」が結成され、互いに食事を共にしたり、行事に参加したりしていたようである<sup>46)</sup>。芳賀も時々近角と会ってい

る<sup>47)</sup>。ほとんどの場合は本山から同行した池山も同席していることから、近角と池山は一緒に行動することが多かったように見受けられる。時々西本願寺からドイツ駐在に派遣されていた藺田宗恵も加わっている<sup>48)</sup>。この藺田宗恵の日記に、訪英の際「夏目（金之助）に若し閑あらば此処（パデントン）にて出会せんと申込み置きしも、差支へありと見えて来り居らず」とある。（「滞欧日誌」明治34年10月17日）漱石はこの時期欧州滞在の日本人とは少し距離を置いていたようであるが、帝国大学時代には、夏目は藤代、藺田、芳賀、松本（文三郎）らとはほぼ同期生で、藺田以外は同時期に研究科に進み、互いに旧知の間柄であった<sup>49)</sup>。また、漱石は藤代禎輔とはその頃から特に親しく、同じ船でヨーロッパに渡り、同じ時期に帰国した「朋友」で、藤代と常観もヨーロッパ滞在中には親しく付き合っていたことなどから考えれば、漱石と常観は直接面識があったかどうかはわからないが互いのことについてはよく知っていたはずである。母もどこかでこのことを耳にしたのであろう。

### 3.2 ベルリンへの便り [資料2]

#### 3.2.1 常音への受験アドバイス

〔資料2〕は1902（明治35）年正月に丸山環からドイツ滞在中の常観に出された書簡である。上の「伯林通信」はこの書簡を受け取った後で書かれたと考えられる。封書5枚とかなり長い手紙である。宛名は「*Herrn Dr. Chikazumi, Japanische Gesandtschaft, Berlin, Deutschland*」 「獨乙行」とある。ドイツ語のスペルもなかなか判読が難しい手書きで、この部分についても「翻刻」が必要であった。「日本公使館」は *Japanische Gesandtschaft* とわかったが、この語は「公使館」同様古い言い方で、若いドイツ語母語話者でもこの部分はすぐには判読できなかったのは興味深かった<sup>50)</sup>。

手紙の中身は内容によって（1）から（5）まで番号がふられている。（1）は新年の挨拶と書籍のお礼。（2）では、ドイツからの写真を受け取ったこととそのコメント、および丸山の近況を知らせた内容になっている。常観の写真について、「スタイルも東京御逗留中とは変り立派なる洋人かとも見江申候。バルトも余程独乙風にて前年とは非常之変化有シ候」とある<sup>51)</sup>。これと同じと思われる写真は家族や友人たちにも送ったようで、求道会館にも保管されているようである<sup>52)</sup>。先にあげた『芳賀矢一文集』に1902年に撮影されたドイツでの写真が掲載されていて、「立派なる洋人」のような常観も他の5人と一緒に写っている。常観の留学中に丸山の家族が増えていることも報告されているが、これについては注36の薄田泣菫の話を参照のこと。

（3）の部分は常観の弟常音の進学問題についてで、かねがね常観は丸山に常音のことを相談していたようである。丸山がわざわざドイツまで書簡を送っているのは、受験時期を控えて早く受験先を決める必要があったからであろう。常観がベルリンに滞在中、後に日本の耳鼻咽喉

科学の先駆者ともなる、当時帝大を卒業したばかりの久保猪之吉が、試験準備のため上京していた常音の面倒を見て、逐次弟の近況を報告している<sup>53)</sup>。常音は一度一高の試験に失敗し、結局金沢の旧制第四高等学校に入学したが、在学中訳あって上京し、東大文学部の選科に入学している<sup>54)</sup>。この書簡から、常音が第四高等学校を選んだのは丸山のアドバイスが大きかったことがわかる。この時期は帝大への進学希望者が増加し、当時は高校卒業者に帝国大学への自動的な進学が認められていたため、実質上帝大入学は高校入試で決まったということがあり、いわゆるナンバースクールといわれる帝大進学を担う高等学校への入学競争が一層激しくなった時期であった。書簡にある「昨年より高等学校入学試験一定せられるに」とあるのは加熱する高等学校への受験競争を緩和するため全国同一の試験問題により合格を決める「共通試験総合選抜」制度が導入されたことを指すが、予想に反して一高を頂点に学校間序列ができあがることになり、一高の競争率は平均競争率3倍を超える4.4倍になっていた<sup>55)</sup>。このような状況を踏まえ、文部官として丸山は今年も状況は変わらず受験者も多いと予想される上、何度も失敗すれば将来に禍根を残しかねないので「当年は断然第一<sup>一</sup>入学之志望を變する方将来之得策ならむと愚考致候」とアドバイスをしている。

(4)の部分は、これを受けて常音には第四高等学校を推薦し、その理由などを書いている箇所である。「御令弟をして独乙文学を専修せしめんと之御考ならば小生は第四<sup>二</sup>入学を御す、め申候」と、その理由に当時四高の校長を勤めていた北条や優れた教授陣がいることをあげている。北条とは北条時敬で、ドイツ語教授陣については「若手にては中目、西田諸君あり」とあるが、この「西田」とは西田幾多郎で、当時はまだ哲学者として有名になる前で、四高で倫理、心理、英語の教授を兼任していた<sup>56)</sup>。書簡にある「昨年より各学校にて同日に入学試験を致し…」は上にあげた新しい「共通試験総合選抜」制度のことで、高等学校が同じ日に一斉に同じ問題で入試を実施し、入学志望順位によって入学先が決定されるため、どこの試験所でも受験できるようになった新しい制度を指す。常音の受験面倒を見ることを約した書簡である。このように、この書簡には教育制度事情を熟知した文部省の官僚らしい丸山のアドバイスが随所に見られる。なお留守中の近況について、「旭野君は清沢文学士之シスターインロフと、結婚せられ…」と清沢満之の名前も上がっている<sup>57)</sup>。なお第四の独乙文学担当教員として西田と一緒に名前のがっている山田郁治はこの前年の1901(明治34)年に二高から四高に転任し、舎監や生徒監を務め、ドイツ文学翻訳で知られる教授である<sup>58)</sup>。中俣匡、は東京大学医学部を出て、東京大学予備門教諭を経四高教授についている<sup>59)</sup>。中目とは中目覚で、帝大独文科で丸山の一級上の先輩にあたり、フランス語担当を兼任していた。丸山が言うように当時四高ではドイツ語の教授陣も充実し、またドイツ語の授業時間数も多く、当時ドイツ語教育がいかに重視されていたのかがわかる。

### 3.2.2 西田幾多郎と常観

西田の名前が出たので、少し常観と西田幾多郎について触れておきたい。西田の弟子にあたる三木清が一高在学中に求道学舎に通い常観の歎異抄に感銘を受けたことは有名で、岩田も三木と常観については1章を割いて詳しく論じている。しかしながら、常観と西田との関係についてはよくわかっていないようである<sup>60</sup>。西田は自身とともにいわゆる「加賀の三太郎」と称された鈴木大拙（本名貞太郎）や清沢満之、南條文雄、井上円了、暁烏敏、など多くの仏教関係者とは親交を持っていたにも関わらず、近角とはなぜか距離を置いていたようである。もちろん西田が全く近角を知らなかったというわけではなく、例えば西田の日記には「...午後釈尊降誕会に〔ゆ〕き加藤咄堂、近角常観の演舌をきく」とあることなどからも、実際に話も聞いていたことは確かであるが、積極的に親交を結ぶことはなかったようである<sup>61</sup>。ちなみに西田が出かけた「釈尊降誕会」は金沢第四高等学校で有志によって執り行われたもので、『求道』の「編集余録」にも常観の参加予定が報告されている<sup>62</sup>。西田は四高では青年仏教徒の作る「道友会」の面倒をよく見ていたようである。

このように西田幾多郎は近角常観とは直接親交はなかったもの<sup>63</sup>、この書簡の差出人である丸山環とは関わりがあり、丸山が校長を務めた旧制の甲南高等学校の教授の紹介などについて相談を受けていたようである。西田の日記には丸山の訪問や手紙のやりとりについての記載がいくつかある。最初は1924（大正13）年1月に、丸山が「三宅剛一」についての相談に西田を訪れ、後日この件について西田が手紙を出していることが書かれている。3月にもこの件で丸山が2度西田を訪問している<sup>64</sup>。この時期はちょうど丸山が松浦文部次官を通して甲南高校の校長就任交渉を受けている時で、結局6月に丸山は六高から甲南高校に移っている。丸山がこの甲南高校校長職に就任するにあたっての経緯は、実業家であり後貴族院議員となり、広田内閣の文相をも努めた甲南学園の創立者で当時甲南学園理事長の平生鈺三郎の日記に詳しい<sup>65</sup>。平生は甲南高等学校初代の校長である小森慶助の学校運営に不満を持ち、松浦文部次官に後任の推薦を依頼している。松浦はこの時期、第一から第八までの「ナンバー・スクール」に加え甲南設立の2年前にいわゆる「ネームスクール」としていち早く設立された武蔵高等学校主事である山本良吉の推薦を受けて丸山を後任の校長に迎えることに決めている。実はこの山本良吉は金沢の第四高等学校の前身である石川県専門学校で西田幾太郎、鈴木大拙とは同級で、「3人会」を作り、終生親しく付き合った間柄で、しかも甲南高等学校設立に協力しその後理事を務めた実業家安宅弥吉もやはり石川県専門学校の卒業生で、山本、鈴木、西田とは親しい間柄であった<sup>66</sup>。そのような安宅との関係で石川は甲南高校の開校式にも出席している<sup>67</sup>。丸山は松浦や山本とは文部省関係で繋がり、このような関係で小森の後任として甲南高等学校の校長に就任したと考えられる。校長時代も丸山は西田に教授の紹介依頼など、人事に関する相談を持ちかけていたようである。西田は平生鈺三郎とは直接面識がなかったが、こ

ういう関係で平生夙三郎も西田の日記に登場し、人柄についての感想などが書き記されている。丸山が甲南高校の校長を辞めた後（1932（昭和7）年）も校長の選出にあたっては平生も頭を悩まし、結局平生自身が校長に就くことになるが、1939（昭和14）年に西田が山本良吉に対して何度か書簡を送り、甲南の人事に関わって自分の考えを平生氏に伝えて欲しい旨依頼している書簡が残っている<sup>68)</sup>。後西田の次男である西田外彦が教授として赴任し、この関係で西田の弟子である天野貞祐が甲南高等学校の校長に就く<sup>69)</sup>。いずれにせよ、このように、西田は学問一辺倒ではなく、弟子や知人の就職などにも色々気を配り、積極的に世話をしていたことがうかがえ、また丸山環も思わぬところで人脉の広さを利用して、重要な役割を果たしていたことがわかる。一方常観が西田と交流がなかったのは、常観は常々信者や宗教運動の協力者等との交流には熱心であったが、いわゆる宗教哲学者や理論家とは一線を画していたところがあったからであると考えられ、これも常観の宗教観というか生き方の一面をよく表しているといえよう。

### 3.2.3 ベルリンからの帰国

さて、常観の海外視察に話を戻せば、常観はこの書簡を受け取った年の3月に東本願寺の命により急遽帰国する。当初は7月に「横浜埠頭での迎え」が予定されていて、この丸山からの手紙でも「貴兄には何時頃御帰朝之御考に候哉御尋申上候一日も早く無事御帰国拝顔之期を屈指待仕申候」と帰国について尋ねていることから、帰国が急に決まったことがうかがえる。

帰朝命令を受取った時の心境については『信仰問題』に「独逸より」として収められている<sup>70)</sup>。1902年2月4日に学校から帰ると帰朝を促す電報を受け取る。「何用か分からねど...道理理屈なしに早速帰ることと決心して、直ちに立出た<sup>71)</sup>」。これには理由があって、その未明、宿で床にいる時「突然として父母の慈訓を回憶して、翻って一昨春已降西遊の経過を追懐し感慨止むべからざるものあり」との「深遠微妙の念」からという、常観の重要な一面でもあるが、一種特有の「夢告」に通じる直感からである。実は、この本山からの帰国命令は留学前の宗教法案反対運動などの実績もあり「この年の衆議院議院選挙に出馬させるための帰国命令」であったようであるが、常観はこれを辞退し宗教活動に専念する<sup>72)</sup>。

帰国に先立ってベルリン在住の日本人によって送別会が行われている。帰国の2日前で、芳賀矢一の2月10日の日記に「快晴 寒し...夜スパーテン、プロイにて近角、池山二氏の送別会あり。会者22、3人」と記されている。帰国の途につく前夜、友人たちの手伝いを得て旅支度を終わり一人となると「孤燈影下俯仰感慨に堪へず」と多少感傷的になっていたことがうかがえる。

そもそも当初の滞在予定からいけばもう一年残っていたわけで、そのための研究計画や視察の構想もすでに考えられていた。『宗報』に掲載された「伯林通信」に本山に対して滞在中の

予定に関する希望がいくつか述べられている<sup>73)</sup>。その一つが

…帰朝の節は不肖は是非印度地方に立寄り一は仏教の遺跡を詣し之を調査し如何に現時の仏教が活力を失するか其原因の那邊にあるか其他回々教基督教等と比較して其現況を十分調査致度此岸に御座候何れ改めて新御門跡臺下へ御願申上度…」

とある。このインド訪問の希望の理由として、当時ベルリンで知り合い、帰国後は求道会館設立の際にも協力する京都大学教授松本文三郎や東京大学教授の姉崎正治も帰国の際半年ほど研究旅行としてインドに寄っている例を挙げ、自分は仏教の研究だけでなく仏教の麻痺状態と活性化の可能性など「社会的観察」を行うつもりで、ぜひインド訪問の機会を与えて欲しいと訴えている。加えて、同行していた池山についても言及し、「池山は帰途は西比利亜を横断して浦監斯徳に出づる考に候是亦将来尤も有事の地方なれば是非共知り置く必要有之候間不肖と役目を分担致候次第に候」と希望を述べ、平生から池山と毎週2回宗教法及び将来施設に関する研究会を開いていることを報告している。ここで触れられている「社会的観察」「宗教法研究」「実際の施設問題」は帰国後の常観の宗教活動を語る上でのキーワードともなるもので、特にこの欧米訪問で西洋におけるキリスト教の現実を視察して、さらなる探求、研究の必要性と緊急性を再確認していたことが読み取れる。この辺りの詳しいことは『信仰問題』の「外篇」で論じられている。しかし、急な帰国命令で結局常観のインド訪問も池山のウラジオストック経由での帰国も実現しなかった。

### 3.2.4 雑誌『政教時報』、『求道』の発刊と休刊事情

岩田は常観の信仰活動を彼が発行した新聞や雑誌の種類にしたがって大まかな時代区分を施し、それぞれに掲載された評論や講演録を吟味することでそれぞれの時代の信仰活動の特色を浮かび上がらせている。ちょうど欧米視察から帰国した常観は、定期刊行物で言えば、大日本仏教同盟会の機関紙でもあった『政教時報』から雑誌『求道』へ転換をはかった時期にあたり、岩田はこれを「青年常観の政治活動」（第4章）から「壮年常観の信仰運動—求道」（第5章）として捉え、詳しく説明している。つまり、この変化は常観が大日本仏教徒同盟会という組織に身を置きながら、宗教法案や公認教制度など国の宗教制度に対する反対運動を積極的に推し進めた時期から内面の信仰を深め、若者や一般信者を信仰に導き、社会生活の礎とすることを目指す信仰運動への転換を象徴的に示す出来事とも言える。ただ、もう少し詳しく見れば、この政治的活動重視から内面の信仰や社会貢献の重要性を訴えるスタンスへの移行は、異なる機関紙発行という形で顕在化したのではなく、すでに廃刊前の『政教時報』の途中で生じていることがわかる。それはまさに西洋視察から帰国し、求道学舎を開設し、日曜講話を始めた時期

と一致する。1902（明治35）年6月に刊行された『政教時報』の巻頭には「本誌の改良」と題して次のような表明がなされている<sup>74)</sup>。

... 茲に本誌次号より一大改良を施し、紙数を増加し、議論的態度を避けて、實際的施設を事とし、文字平う易を主として知識の普及を謀理、欧米諸国に於ける实例を挙げて以て参考に供し、基督教の経営を挙げ他山の石以て戒となさむとす、殊に宗教制度、慈善事業、社会問題、何も欧州多年経験の結果にして、我国今後將に起こらむとするもの殆むど彼か後を追ふの概あり、其一長一短、以て資するに足るものあり、殊に活用の中心は仏教の信仰を以て其生命とし、実行を以て要義とする一言以て本誌の改良を予告する事如此<sup>75)</sup>

また同号の巻末には「社告」として「今回帰朝したる近角常観氏主として本誌のために筆を執られ、氏と行を同ふしたる池山栄吉氏亦大に力を致さるる事となりぬ。両氏が研究の結果、視察の事項、号を追ふて漸次掲載するを得む、且つ今後、知名の人、同憂の士に請ふて、其実行の意見を掲げ、以て光彩を放たんと欲す。」とある。この予告通り次号から近角、池山による欧米各国の宗教史や宗教制度、政教関係、教会の社会事業など熱い記事が、仏教の教義に関する講話などとともに各巻を飾ることになる。また近角の掲載評論は「西教事情」としてそれまで随時『政教時報』に掲載されていた視察記や評論と合わせて、2年後に『信仰問題』（特に「外篇」、「付録」）として出版されることになる<sup>76)</sup>。

この『政教時報』は1904年発行の107号をもって終了し、その継続誌として新たに『求道』と改題された機関誌がスタートした。この「改題」に踏みきらせたのは単に上に挙げたような理由だけではないように思われる。それは第80巻の「改良」以外にも何度か表紙や構成などに変化が見てとれるからである。全体的に無記名の記事も多いが、執筆者に注目すると、丁度常観が欧米視察に出かけた直後に発行された30号からは新たに「信界」欄が設けられ、それまで掲載されていなかった清沢満之や暁烏敏、佐々木月樵、多田鼎など、いわゆる浩浩洞同人などによる小論が掲載されはじめている。この変化の理由の一つには、『政教時報』は発刊当時より宗教法案反対の立場から、様々な関連論説や記事を掲載してきたが、ちょうど近角の渡欧前に法案は否決され、一応の決着がついたということがあり、ある意味この変化は当然とも言える。近角が渡欧すると、翌年は近角の西教時報など欧州からの報告が多く見られるようになる。ところが常観が帰国すると清沢等の掲載はほとんどなくなり、「改良」に伴い、もっぱら信界欄は近角の講話になり、そのほかにもほぼ毎号近角と池山の論説などが掲載されるようになる。当時近角常音がベルリンの常観に送った書簡に「政教時報相変らず気力なし。兄上御帰朝の日迄は到底駄目なるべし」と書いている<sup>77)</sup>。このようにこの機関紙の発行については、いかに近角が深く関わっていたのかがわかる。常観が帰国して後約1年後に発行された36年

4号がちょうど100号にあたり、この号から表紙の体裁も大きく変えられ、また発行回数もそれまでの月2回（原則1日、15日）から月1回に変わっている。近角らしく、100号はちょうど4月8日に発行していて、以後毎月8日が発行日となる。ところが、続く6月発行の102号には「清沢満之氏逝く」「清沢先生を哭す」との訃報が伝えられる。そのせいか次の103号は『政教時報』発刊以来初めて一月遅れの発行となる。そして年末までの4号を発行してこの『政教時報』はこれを以って廃刊になる。このように見ると、次の『求道』への改題はやはり清沢師との別れが一つの節目となり、新たな出発を決意することになったのではないと思われる。

『政教時報』を引き継いだ『求道』については岩田がその著書で詳しく論じている<sup>78)</sup>。ここでは、やはり『求道』が休刊に至った事情について、常観の個人的な事情と合わせて、考えてみることにする。『求道』は1922（大正11）年発行の第18巻第1号が最終号となっている。『政教時報』や『信界建現』については、その廃刊にあたっては理由が紙上に掲載されたのに対し、『求道』は、単に後続の号が発行されなかった、といった中途半端な終わり方をしている。岩田は「休刊の理由は定かでない」としながらも「関東大震災の影響があったことはまず間違いない」し、また「句仏上人問題も関係したかもしれない」と推測している<sup>79)</sup>。『求道』掲載の記事を見る限りでは、休刊理由として次のようなことが推測される。

まず年間発行号数の変化を見ると、第1巻発行の1904（明治37）年から11巻発行の1914（大正3）年まではほぼ毎月か2ヶ月に1号は発行されていたが、1915（大正4）年とその翌年は3号と激減している。そして翌年1917年は1号も出版されていない。13巻の3号は5月に発行され、次の14巻1号の発行が5月なのでこの間ほぼ2年弱休刊していたことになる。12巻についてはちょうど求道会館落慶の年なので、準備に忙しかったこともあろう。しかしその翌年からの突然の休刊については事情がよくわからない。ただ、ちょうどこの時期常観の継母雪枝が病気になっているので、そのことが関係するのかもしれない。また、1918（大正7）年に発行を再開するにあたって、「はしがき」のはじめに次のような「謝罪文」が書かれている<sup>80)</sup>。

久しく『求道』を休刊して実に申訳がありませぬ、何の理由もない、我等関係者の怠慢の罪といふより外はありませぬ、併絶対に廃刊するつもりではなかったゆへ、御断りもせずには居りましたが 厳しき御叱りも蒙らずに御待ち下された御好意は何とも申様がありませぬ。

この年は何とか6号まで発行されているが、翌年からはまた3号（15巻）、2号（16、17巻）、そして最終巻となる18巻は1号と徐々に減少した。その後、関東大震災が起こるまで1年以上発行されていないので、休刊の直接の原因は他にあったと考えられる。14巻6号には「終

始休刊続きにてだらし無き発行なるに係はず、ご愛読下されたことを深く感謝いたします。何分思はざる私的事情あらはれ来ると、一つは力不足の爲め、思ひばかりにていつも申訳なきことのみと相成り」と詫び文がある。「思はざる私的事情」からの心労が本当の理由かもしれない。

発行号数が極端に減った12巻から、雑誌の構成も変化した。つまり、『求道』の特徴でもあった「告白」や「雑録」、「時報」などが全くなり、講話を筆記したものが3、4編載るだけになった。ただし、内容はどれも濃く、読み応えがある「ありがたい」内容ばかりである。講話中心になったことについて、先の「はしがき」に、中央首都の求道者は求道会館建設のおかげで直接話を聞きに来てくださる便宜ができたので、地方にいて、聞きに来ていただけない方に、講話を印刷して読んでいただきたい、とも書いている。

発行号数が減り、実質休刊になった事情として、当時の世相というか世界情勢が関係しているとも考えられる。つまり、第一次世界大戦である。ちょうど開戦の年から発行号数が減っていることがある。戦争が終結した翌年1919年に出された15巻の広告に「雑誌値上広告」として、「...一昨年来の世界戦乱による紙価暴騰に加へ、殊に今年初来の社会事情の変遷に伴ふ印刷製本工賃の大暴騰にては、本誌の如き特殊雑誌は殊に経営困難の事情に立ち至つて参りました。」とある<sup>81)</sup>。またこの時期の論説は世界動乱や世界平和と宗教をテーマとしたもので、ほぼ毎回世界情勢と宗教を論じた文が掲載されている。『求道』休刊にはこの様な国内の経済的事情や国際情勢の影響もあったと推測される。

### 3.2.5 井口乗海の回心告白

この新たな雑誌『求道』の発行は常観の政治的活動から内面の信仰重視という転換を支える事業であったが、この『求道』の特徴の一つとして、岩田は一般信徒、読者による「信仰告白」欄の新設をあげている<sup>82)</sup>。信仰告白といえ、やはり常観自身の宗教体験としての「回心」が思い起こされるが、「仏教の信仰を以て其生命とし、実行を以て要義とする」契機として、宗教的「実験」の重要さを知らしめるために多くの人々の回心談の共有を思いついたのであろう。

岩田は信者の回心経験の例として特に福島政雄と白井成允の場合をその著書で紹介している<sup>83)</sup>。ここでは、加えて、日本の近代化の進展に重要な役割を果たしながら、近角と同じようにその名を忘れられ、郷里でさえその名や業績を知る人がほとんどいなくなってしまった人物の回心告白について少し書いておきたい。やはり常観の郷里関係の人脈の一人である。その人物の名は井口乗海といい、奇しくも常観と同郷で、常音とは同級で幼馴染である<sup>84)</sup>。常観の生家西源寺とは4、5百メートルほどしか離れていない真宗大谷派末寺通覚寺の次男に生まれ、苦学の末、後に東京で防疫官として近代的な衛生思想普及に努め、東京市民の衛生教育に

多大な貢献をした人物である。東京での忙しい日々の中でも幼い頃から両親から教えられた念仏の生活を忘れず、故郷の檀家に思いを馳せる一方で、東京看護学校の講師として多くの看護婦を育てたり、日本医科大学や財団法人佛眼協会の維持経営に奔走するなど、伝統的な信仰に根ざしながら新しい視点で社会教育、社会事業を実践した人物であり、この点常観とも通じるところがある<sup>85)</sup>。昭和15年には「権僧正」の僧位に補され、亡くなる直前には第一功章が授与されている。葬儀には京都本願寺から当時宗務総長であった大谷瑩潤が導師として派遣され、浅草本願寺輪番常盤大定師が副導師を勤めて厳修されるなど、一市民の葬儀としては「異例」づくめで、功績の大きさがうかがえる。句仏もその死を悼んで句を献じている。亡くなってまもなく、生前乗海により再建された本堂の前に自然石の墓誌が建てられ、表にはその句仏の句「悼 乗海御房／有事の時／亡きを思へば／肌寒し」が、裏には財団法人佛眼協会による「頌徳の辞」が彫られている<sup>86)</sup>。

さて乗海による回心の告白についてであるが、この回心は掲載された『求道』発行の少し前（明治45年）に体験されたようで、乗海はこの年30歳<sup>87)</sup>。上京して3年ほど経っていた。それまでは大阪で小学校の教員をしていたが、母と交わした「通覚寺再興」の約束を守るため、医学の道に進むことを決意し、上京している。上京後常観の元に駆け込むが、すぐに常音から丸茂病院院長の妻むねを紹介され、その世話になる<sup>88)</sup>。

乗海の信仰告白の表題は「10年の同情者を失ひて永劫の同情者を得たり」というもので、結婚をいい交わした女性の心変わりや悶え悩む日々を体験した入信についてである。ただし、女性と言っても結婚を考えていたのは小学校の教え子で、その母親との間で将来について交わした約束が離れ離れに暮すうちに結局破談になってしまったことに端を発した悩みである。非常に貧しい境遇で苦学生活を送らざるを得なかった中で、唯一彼女との約束だけを心の支えとして頑張った末にこのような仕打ちにあい、そのように思い込ませた彼女のまやかしと、自分の不甲斐なさに身を焼くほどの苦痛に悶えた日々を過ごす。寺の生まれで両親も信心深い環境で育って来たにもかかわらず、信仰を求める気持ちも一向に湧かず、煩悶が極限に達して、世話になっていた丸茂の奥さんや常音たちに悩みを打ち明けるも、満足な答えが得られず、「何故自分には罪悪感がないのだろうか」と悩み、やっとの思いで九段へ参詣する<sup>89)</sup>。ある時、そういう乗海を見て常音は「自分の頭で考えては一代かかっても解決はつきませんよ」と助言する。また一緒にいた塚原は「御慈悲は此方で考へる様な小さなものではなく、又此方でよい加減に想像して方向違ひに考えたりしてるとは勿体ない事ですよ」と言葉をかけ、それを聞いて乗海は「ハッとし」、「何となくフーとした心持ちになり、恰も水底に沈んで居た体の浮き上がりし如く、堅くなりあし体は慥に柔らかくなりし心地して、嗚呼今日迄求めて探して居た同情者は此佛様であったか」と気づかされる<sup>90)</sup>。それから初めて信仰の妙味を味わうことになる。「近角先生は父に代わり、丸茂の奥様は母に代わりかかる幸福を得せしめて下さった」

「行け行け」と勧むる母もあり「来たれ来たれ」と呼ぶ父もありまして、「『汝一心正念にして直ちに来たれ、我能く汝を守らん』との勅命に救われた」と告白している<sup>91)</sup>。心変わりした「彼女も今となっては善知識」で「彼女の同情は失ひましたが、今は何処へでもついて来て、何時でも離れず、決して見放し給はぬ御手丈夫な同乗者を得た」と念仏の生活が得られたと告白している<sup>92)</sup>。

この回心経験で信仰に目覚め、乗海は新たな人生をスタートさせることになった。その契機となったのはやはり結婚と就職である。ここでも常観の従弟である丸山環が関係している。医師を目指して苦学生活は続くも、やっと日本医学校を卒業し、医師試験にも合格し医師の免状を手にする。その頃知り合ったのがやはり同郷の寺の長女で、医学の勉強のため東京に出てきていた娘井口まさの（政能）である。まさのは現長浜市高月町宇根にある浄照寺井口圓證の娘で、井口家は丸山環の親戚でもあった。まさのと所帯を持ち医師の免許を手にした乗海は丸山に就職先の斡旋を依頼する。丸山は乗海に警視庁検診医員の職を斡旋した<sup>93)</sup>。はじめは乗海もこの職の待遇に不満を持ち、一旦は断ろうとするが、丸山から「俸給の多少で出処進退を左右するやうなさもしい人間なら今後親戚としての交際も断るほかない」と言われ、結局覚悟を決め生涯を警視庁の医療担当員として奉職する決心をする<sup>94)</sup>。

『求道』などで告白される回心の契機となるのは、大抵の場合人間関係に関わる煩悶や身近な人の死である。例えば、乗海の場合であれば、一つには許嫁の「裏切り」による煩悶であり、加えて、大正8年に大流行したスペイン風邪で長女をなくしたことである<sup>95)</sup>。この不幸にも「この俺に与えられた転職のどんなに尊いものであるのかを知らせるために仮に井口家の長女として生まれた如来の還相回向の姿なのだ」と<sup>96)</sup>、防疫の仕事を仏から与えられた天職だと確信し、仕事に打ち込んだ。

求道会館の書簡資料の中に井口乗海から幼なじみの常音に出された手紙が数通見ついている。詳しいことについては別に稿を改めて書くが、井口乗海も常観の故郷における人間関係や人脈を考える上で重要であることを指摘しておきたい。

(以下「下」)

資料：翻刻

◆ [資料 1]

明治 33 (1900) 年 10 月 13 日消印、丸山環差出・近角常音宛 (官製はがき) (求道会館資料番号 9281)

(宛所)「東京市本郷区／丸山新町二十番地／近角常音様」

(差出所)「岡山市門田屋敷四十一／丸山環」

朝夕冷氣相催候御

愈御清栄之段奉大賀候

拙子無事出校致仕候間御安心被成下度候

私事当分之間表書之處居住仕致候間左様御承知相成度万一転宅致候節は直に御報知可申上候

◆ [資料 2]

明治 35（1902）年 1 月付、丸山環差出・近角常観宛（封書・便箋 5 枚）〈求道会館資料番号 3238〉

（封書表）「Herrn Dr. Chikazumi, Japanische Gesandtschaft, Berlin, Deutschland」 「独乙行」

（発信消印）①「備前／岡山／卅五年一月／三日」②「備前／岡山・□□□一月／□日／□便」

（封書裏）「独乙ベルリン／日本公使館／文学士 近角常観様／三十五年一月一日

「一」

謹賀新年

御送与之貴影本日正に落手いたし候

貴兄定て御多祥御越年之事と存し喜仕候

当方一同無事加年いたし候間御安心被成下度候

偕貴兄よりは毎々御書翰に預り且つ昨年は結構なる書籍わさへ御投与被成下候にも拘らず今度も返書差上申さす定て御立腹之御事と察し仕候

多罪之段は幾重にも御海容被成下度願上〔(破損)〕

「二」

一本日即正月元旦貴君之写真到着いたし候

宛も拝顔せし心持にて殊に御健全之様子故愚妻とも喜仕候

スタイルも東京御逗留中とは変り立派なる洋人かとも見江申候

バルトも余程独乙風にて前年とは非常之変化有シ候

呵々偕貴兄には何時頃御帰朝之御考に候哉御尋申上候

一日も早く無事御帰国拝顔之期を屈指待仕申候

一私方には一同打揃ひ無事消日致仕候

小生は例之通り無病にて日々出校いたし仕候

学校之方も御蔭にて昨年末増給相成近々官等も昇進する様子に候

艶も御蔭にて達者にて家事に尽力致仕候

操も既に五歳に相成なかへ之御厄介に御座候

長男一郎も健全にて母乳なき為コンデンスミルクにて養育いたし昨年末よりよろへと歩み仕候 体格はなかへ立派に御座候愚妻は又候三四月には分

「三」

娩之筈にて貴兄御出発之節は操一人に有シ候処御帰国之際は既に三子之親となる老人に候然し一同之無事なるは何より之幸福と喜仕候

一昨年より高等学校入学試験一定せられるに第一之志願者自然と多数に相成不合格者も随て増加致候御令弟にも御氣之毒之至に候

本年も矢張り第一高校<sup>江</sup>入学可致と之御考に候哉小生之考にては第一<sup>江</sup>入学を希望するものは非常之多数故合格はなか〜容易ならさる事と考申候

一度位之不合格は決して恥るに足らさるも二度三度不合格と相成候ては或は学問之方針をあやまらさるかとも懸念いたし候

殊に御両親も御老体之事故可成早く成業相成方両親へ対しても孝行之一端かとも考申候

夫故当年は断然第一<sup>江</sup>入学之志望を變する方将来之得策ならむと愚考致候

〔四〕

殊に近頃は各高等学校に於ても何れも学徳之並行を期し仕候事故何れ之学校に子弟を托するも安心ならむと断言致候

若シ貴兄に於て昨年之御考通り御令弟をして独乙文学を専修せしめんと之御考ならば小生は第四<sup>江</sup>入学を御す、め申候

其故は独乙文学之教員之申分なきは第四にて老年達にては山田郁治中俣匡等之諸氏あり若手にては中目、西田諸君あり独乙人も教授法にて巧之様子に候

昨年より各学校にて同日に入学試験をいたし第一入学之人にて第六にて受験してもよろしく金沢を希望する人にては岡山にて受験致候ても差支なく多少此点は便利に相成申候

兎に角第四に於ても北條校長は非常に品行に重をおき古之第四とは雲泥之差に候へは第四<sup>江</sup>入学可然候と考申候若シ左様に相成候は、常音君を岡山<sup>江</sup>

〔五〕

呼よせ当地にて受験致させてもよろしく或は東金沢之友人に托してもよろしく其辺御熟考之上御返事被成下度候

一当地は何分一辺鄙にて都之様子を知るに由なきも月見君は北方くが子と旭野君は清沢文学士之シスターインロフと、結婚せられ堀君南原君又既婚之風説有シ候

申上度事山々有之候へ共夫は後便に譲り申候何分にも御自愛專一と奉祈候

一月一日

丸山 環

近角学兄

注

- 1) 求道会館館長近角真一氏、大阪教育大学教授岩田文昭氏には資料の提供や、貴重なアドバイスをいただいた。近角による出版物や求道会館所蔵の書簡閲覧に関しては、岩田教授が代表する『実験と伝統—明治・大正期の宗教と心理体験』（16 k 02181）の研究成果に負うところが大きい。
- 2) 近角 櫻子『求道学舎再生—集合住宅に甦った武田五一の大正建築』（学芸出版社、2008年）。
- 3) 岩田文昭『近代仏教と青年—近角常観とその時代』（岩波書店、2014年） vi 頁。
- 4) 碧海寿広『近代仏教のなかの真宗—近角常観と求道者たち』「序章」（法蔵館、2014年）14 - 15 頁。
- 5) 明治期から昭和にかけての「青年」とは単に「若い世代」という以上にその時代背景、世相を反映し

た意味合いをもつ言葉である。常観もしばしば「現代青年の煩悶」について語っているが、常観が相手にした「青年像」も掘り下げて考える必要があるであろう。

- 6) 現在の長浜市高月町西阿閉にある真宗大谷派の寺院旭松山恩覚寺。
- 7) 岩田文昭『近代仏教と青年—近角常観とその時代』19頁。
- 8) 長浜城歴史博物館友の会主催で開かれた『平成28年度湖北学講座』第1回「浄土真宗の求道者—近角常観とその時代—」の講演会。（平成28年6月26日長浜市勤労者福祉会館「臨湖」で開催）。
- 9) 研究課題番号 JSPS 20520055。中間報告書は平成21年11月に出版され、この報告書には常観が中心となって発行、出版した定期刊行物『政教時報』『求道』『信界建言』をおさめたDVD4枚が添付されている。また、最終の研究成果報告書は平成24年3月に公表されている。以下の論考で用いた『政教時報』『求道』『信界建言』の資料については、このDVDを利用した。上に引用した碧海氏も研究グループの一人である。二つ目の科研費による研究は「青年知識人の自己形成と宗教—近角常観とその時代」（JSPS 24320018）である。
- 10) 暁烏敏（第12章、碧海寿広・谷川穰〔監修〕）、武内義範（第13章、岩田文昭）、古澤平作の書簡（第14章、岩田文昭・松本直樹〔翻刻、訳〕）。
- 11) 第11章、114-152頁。ただし、「1 滋賀県の関係者」に近角常観の誕生地として「1870（明治3）年に滋賀県東浅井郡朝日村（現在は長浜市湖北町）にある…」とあるが、当時「滋賀県」や「東浅井郡」はまだ行政区画の名称としてはなく、正確には岩田文昭『近代仏教と青年』（19頁）にあるように「近江国浅井郡延勝寺村」であった。
- 12) ここで扱う近角宛の求道会館所蔵の書簡については、近角真一氏のご好意により公表の許可をいただいた。また書簡資料については岩田文昭教授から提供を受けた。
- 13) 現在の滋賀県高島市今津町の法慶寺。
- 14) とさは1851（嘉永4）年生まれ。一方、千代野は1873（明治6）年12月28日に命終。行年33歳。これから計算すると、千代野は1840年生まれでほぼ11歳違うことになる。
- 15) 嫁ぎ先は現長浜市湖北町河毛にある「恩長寺」。
- 16) ちなみに、岩田の『近代仏教徒青年』には、西源寺の過去帳には「釈尼妙覚 33歳と記されている」とあるが（19頁）、東野家に残る家系図では「尼妙寛34歳」となっている。
- 17) 次の第16代住職には秀夫がついているが、それまで一時柏原応因寺住職天日獄恵剣が円照寺の兼務（代務）をつとめている（『真宗大谷派寺院録』第6版、1933（昭和8）年）。
- 18) 『昭和45年2月改正再版大谷派寺院録』本山文書科蔵版、『真宗大谷派寺院録』第6版、1933（昭和8）年、による。
- 19) 書簡〔資料6〕、〔資料11〕を参照。
- 20) 近角常観「断腸録」『求道』2巻8号、339頁。
- 21) 『信仰問題』100 - 104頁。
- 22) 『親鸞聖人の絶対真『真之善知識』』、『求道』17巻1号（1924（大正10）年）5頁。
- 23) 『易往而無人』の16「弥陀の智慧ををたまはりて」、『求道』17巻2号（1924（大正10）年）31頁。
- 24) この文句は長男文常が戦死した時を機に『信界建現』の廃刊を告げる宣言の中でも引かれている。（第61号、1938年11月）。
- 25) 例えば、「常観の家族観」（岩田『近代仏教と青年—近角常観とその時代』第7章1）。
- 26) 『近代仏教と青年—近角常観とその時代』補足・修正」、近角常観研究資料サイト（<http://chikazumi.cc.osaka-kyoiku.ac.jp>）、最終閲覧日2018年3月10日。

- 27) 近角真一氏のご教示による。なお、雪枝様の27回忌法要を巡っては、資料[11]を参照のこと。
- 28) 末子常聡やその15年ほど前に生後2月ほどで亡くなった長女光子については「愛児の夭折」として「寂静と応現」の中で心情を露呈している。『求道』15巻2号(1919(大正8)年10月)。
- 29) 本山文書科蔵版『大谷派寺院録』明治45年2月改正再版。
- 30) 大観や竹鼻からの書簡も求道会館のデータベースには残されているが、これらの書簡の解題についてはまた稿を改めて書いてみたい。
- 31) 岩田文昭代表の科研『実験と伝統—明治・大正期の宗教と心理体験』(16k 02181)で作成された書簡類のデータベースから資料の提供を受けた。
- 32) 丸山五郎氏の子息(環の孫)である丸山正通氏による。
- 33) 求道会館資料としてはこの他にも数枚のハガキや封筒(中身なし)も保管されているがここでは省略した。
- 34) 宛名は原文のまま。
- 35) この手紙の日付については、後の説明を参照のこと。
- 36) 薄田泣菫の『茶話』に丸山環についての一文がある(1916(大正5)年4月27日「男二人女二人」)。そこでは丸山の役職が「文部視学官」となっている。督学官は文部省の教育行政官で、ちょうど丸山がこの職にあった1913(大正2)年にそれまでの視学官という役職名から改称されている。薄田による話はイギリスの少子化傾向を嘆いた話であるが、ついでながら丸山の箇所を引用しておく。「文部視学官の丸山環は九人の子福者で、お湯に入る時には自分が湯船に浸かりながら、順ぐりに飛び込んでくる子供達を芋の子でも洗うように赤を擦ってやる。それを夫人がタオルで清潔(きれい)に拭くと、女中が着物を着せるという手順で子供達をそつくり湯を済ます時分には、親はげんなりと草臥れてしまふという事だ。その故(せい)か氏は朋輩知人の家に子供が四人も生(で)きるといふと、その顔を見る度に、「君悪いことは言わないが、もう宜(い)い加減に止したら何(ど)うだ。」と、しみじみ意見立てをするそうだ。」
- 37) 『教学報知』第363号(1930(明治33)年4月9日)には、6日5時より鴨東中村楼にて「大谷派より海外に派遣を命じられ近日出発する文学士近角常観、法学士池上榮吉両氏の送別会を開きたり」とある。
- 38) 真宗大谷派教学研究所の研究員名畑直日兄氏に教わった。『無尽灯』は「真宗大学寮等の有志者」(無尽灯社)によって1895年に創刊された雑誌。清沢満之などが寄稿した専門誌。この「近事」は明治33年4月15日発行掲載。
- 39) 『関根仁応日誌』「1900(明治33)年4月28日の日記」(真宗大谷派教学研究所、2013年)。この件については、真宗大谷派教学研究所研究員名畑直日兄氏の御教示による。
- 40) 求道会館資料3379(秦敏之差出・近角常観宛1902(明治35)年8月11日消印)。秦敏之からの書簡については別稿で解説する予定。
- 41) 第28、29号、1990(明治33)年4、5月号。
- 42) 「馬上の伯母」とは恵誠の妻梢のことか。
- 43) 『宗報』第6号、(1902(明治35)年3月15日)、4頁。
- 44) 上村直己「ドイツ留学時代の藤代禎輔」『明治期ドイツ語学者の研究』(多賀出版、2001)221-258頁。
- 45) 芳賀檀編『芳賀矢一文集』(富山房、国会図書館デジタルコレクション)610頁以降。
- 46) この時期ベルリンをはじめとするドイツの大学は世界最高水準で知られていて、帝大や高等学校からの派遣教授だけでなく、欧米諸国の留学生もドイツに集中していた時代である。常観がベルリンで知

り合った何人かは帰国後求道会館建設や宗門運動を進める過程で力強い協力者となった。ちなみに当時ドイツには213名の日本人が住んでいたがそのうち112人がベルリンにいた。（植村直己『明治期ドイツ語学者の研究』、多賀出版、179頁の注19による）。

- 47) 「近角常観研究資料サイト」(<http://chikazumi.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/index.html>)の「求道会館所蔵の諸資料その他」に『絵葉書』（近角常観発、藤代禎輔宛の絵葉書）がアップされている。岩田教授からのご教示による。
- 48) 1901年に藺田宗恵と常観が中心となって池山や和独会と釈尊降誕会（花祭り）を開いたことは有名である。また芳賀は1902年に大谷光瑞氏が訪れた時について「大谷光瑞氏の一行、日野某、園田、近角、池山等の諸氏に会す」と記している（2月2日日記、657頁）。
- 49) 藤代は明治24年、藺田、芳賀は明治25年、夏目、松本は明治26年に帝大を卒業している（それぞれ7月卒業）。夏目が卒業した明治26年では、文科大学の学生数は20人足らずで、夏目らが研究科に在籍した26年度の文科大学の研究科生数は13名であった。夏目が研究科を修了した明治28年に近角常観は哲学科に入学している。（『東京帝国大学大学一覧』明治26-27による）
- 50) ドイツ語の「翻刻」は立命館国際関係学部 Claudia Kunschak 准教授の母上 Waltraut Kunschak 様にお手伝いいただいた。彼女によれば *Gesandtschaft* は *Botschaft* (embassy) の古い言い方。
- 51) 「バルト」については詳細はわからないが、当時日本で知られていた「バルト」にはスイスのプロテスタント神学者の *Karl Barth* がいる。ただ1902年といえは彼はまだ16才なので、ひよっとすると、やはり神学教授でカールに大きな影響を与えた父 *Fritz Barth* か彼に連れられたカールかもしれない。
- 52) 近角真一氏による。
- 53) 「求道会館資料書簡」に何通か久保からの手紙類が残されている。在学中から常音の受験準備や生活指導をしていた。久保猪之吉からの書簡については別稿で扱う。
- 54) 近角常音「まえがき」『書簡抄・法話抄』（山喜房佛書林、1995年）。また、資料 [5] の書簡解題も参照のこと。
- 55) 秦郁彦『旧制高校物語』（文藝春秋、2003年）75頁。
- 56) 1899年から第四高等学校教授となり、心理、論理、倫理、ドイツ語を担当し「デンケン（Denken: デンケンとはドイツ語で「考える」の意味）先生」と親しまれた。（石川県西田幾多郎記念哲学館パンフレット）
- 57) この「旭野君」とは文学士「旭野慧憲」で、彼は満之の義理の妹に当たる西方寺の五女「ちよ」と結婚した。この件については、西方寺住職清沢聡之氏のご教示による。
- 58) 上村直己『『哲爾自由譚』訳者山田郁治』（『明治期ドイツ語学者の研究』多賀出版、2001年、369-373頁）に詳しい。
- 59) 上村直己前掲書による。
- 60) 岩田文昭『近代仏教と青年—近角常観とその時代』第12章「宗教と哲学—三木清の宗教哲学」。
- 61) 『西田幾多郎全集』第17巻（「1904（明治34）年5月1日（日）の日記」）（岩波書店）136頁。
- 62) 『求道』第4号、1904（明治37）年5月、46頁。
- 63) 少なくとも近角常観研究資料サイト上の「求道会館所蔵の諸資料（書簡目録など）」や『西田幾多郎全集』の書簡集などでは書簡をやり取りした形跡は見られない。
- 64) 話題になっている三宅剛一もしばしば西田を訪問したり、書簡のやりとりをしている。多分就職に関する相談であったと思われる。
- 65) 『平生鈺三郎日記』第6巻 甲南学園平生鈺三郎日記編集委員会編、2012年。

- 66) 山本や鈴木は安宅から経済的な援助も受けていた。
- 67) 「鈴木大拙と大乘仏教の世界紹介」、山本良吉著；川崎明編『晁水先生遺稿』（山本先生記念会、1951年）209 - 216 頁。
- 68) 結局丸山が甲南高校の校長を辞めた後、平生が校長につくことになった。
- 69) 甲南高等学校就任の経緯については、天野貞祐『わたしの生涯から』（日本図書センター、2004、126 頁）や貝塚茂樹『天野貞祐』（ミネルヴァ書房、2017年、第4章2「甲南高等学校の校長就任と挫折」、134-143 頁）を参照のこと。
- 70) 「付録」61 頁。
- 71) 『信仰の余歴』（第15版）「付録」26 頁。
- 72) 近角巖子『求道学舎再生—集合住宅に甦った武田五一の大正建築』（学芸出版社、2008年）59 頁。
- 73) 『宗報』第6号、(1902（明治35）年3月15日）、4-6 頁。
- 74) 『政教時報』第80号。
- 75) 3-4 頁。「政教時報」として掲載されている。原文は引用部分全体に強調符がうたれている。
- 76) 1904（明治37）年。文明堂。
- 77) 1902（明治35）年1月20日消印。（求道会館資料3330）
- 78) 特に「第5章 壮年常観の信仰運動—『求道』」。岩田文昭（研究者代表）『近代化の中の伝統宗教と精神運動—基準点としての近角常観研究—（研究課題番号20520055）平成20年度～平成21年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果中間報告書、2009（平成21）年、に大澤広嗣『「政教時報」 解題』、碧海寿広『「求道」 解題』、ライアン・ワイルド『「信界建現」 解題』がある。
- 79) 岩田『近代仏教と青年—近角常観とその時代』81 頁。
- 80) 『求道』14 卷1号、1918（大正7）年3月6日発行。
- 81) 『求道』15 卷2号、1919（大正8）年10月、53 頁。
- 82) 特に、岩田『近代仏教と青年—近角常観とその時代』 第5章「壮年常観の信仰運動、2「信仰告白」の斬新性」。
- 83) 福島政雄はバスタロッチ研究で知られた教育学者。白井成允は倫理学者。東京帝国大学在学中求道会館へ通っていた。
- 84) 乗海は腕白で、おとなしい常音をよく泣かせていたと回想している。
- 85) 佛眼協会は佛果を信じる盲人を教育する学校で、浅草本願寺の境内を借りて佛眼協会は眼疾者を救い、失明防止、福利厚生増進の為に組織され、同時に佛果を信じる視覚障害者を教育する目的で眼科診療所と佛眼盲学校を運営していた。本部を浅草本願寺に置き、全国各地に支部を設けた。
- 86) 「有事」とは帝都に伝染病が発生した時のことであろう。
- 87) 回心が掲載された告白は『求道』9 卷3号、(1912（明治45）年）、101-108 頁。
- 88) 岩田は『近代仏教と青年—近角常観とその時代』で常観の妻キソを頼って多くの女性信者が通っていたことを指摘し、特に丸茂むねをあげている（94 頁）。むねは日本で7 番目の女医で、やはり『求道』で自らの回心の告白を行なっている（3 卷10 号）。
- 89) 講話は毎日曜に求道学舎で、土曜日には「第二求道会—九段坂仏教倶楽部」で行われていた。
- 90) 塚原とは常観の郷土での同志で、現長浜市虎姫町田にある篠原寺の塚原秀峰であろう。句仏事件の項目参照。
- 91) 善導の「二河白道の喩え」。
- 92) ここでも常観特有の比喩が見られる。仏の慈悲を親の慈悲にたとえ、二河白道の「弥陀の召喚と釈迦

の発遣」も父母に置き換えられている。

- 93) 穎田島一二郎『井口防疫官：井口乗海博士伝』による。
- 94) 丸山の発言はいかにも官僚らしいもので、丸山の一面をよく表している。
- 95) この年はやった流行性感冒に「職務感染」し、結果的に家族も感染し、3歳になったばかりの長女が亡くなっている。
- 96) 穎田島一二郎『井口防疫官：井口乗海博士伝』193頁。

（三宅 正隆，立命館大学国際関係学部教授）

## Chikazumi Jokan's Religious Activities and Connections in His Home Province

Despite the historical impact of his influence on the modernization of Buddhism in the Meiji Era, little has been written about CHIKAZUMI Jokan (近角常観), a Shinshu (True School) Buddhist priest of the Higashi-Hongan-ji Branch, until a recent research project led by Professor Iwata of Osaka Kyoiku University. Professor Iwata's research team founded the Archive of Chikazumi Jokan Research Data Site and compiled a database consisting of thousands of letters and postcards to and from Chikazumi. The author learned from Professor Iwata's publication that little was known of Chikazumi's private life before he moved to Tokyo, including the name of his birth mother. Furthermore, the author found many familiar names in the epistolary database. In this paper, the author will illuminate aspects of Chikazumi's life in his birthplace that have not previously come to light, with special attention to connections with the cousins on his mother's side of the family, including annotated translations of correspondence between Chikazumi and his cousins, including both letters in the Chikazumi data base and other correspondence found at the author's home. Chikazumi was raised in a rural area in Japan, where a traditional parishioner system still existed, and was the head of a temple there. At a time when Buddhists were being persecuted in the wake of the consolidation of State Shinto, Chikazumi devoted himself to the guidance of many younger Buddhists who would become future leaders in the faith. Thus, he was an important reformer of traditional Buddhism and, as such, further research on his activities in his home province will be significant.

(MIYAKE, Masataka, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)